

『桃山時代解剖之図』について Study on the Anatomical Chart of Momoyama Period

真柳 誠 (茨城大学)

Makoto MAYANAGI

東洋藤井文庫蔵の『桃山時代解剖之図』1軸には人や馬の彩色臓腑図があり、獣医学史や解剖学史ではよく知られてきた。しかし各絵図や詞書き、類似絵巻との関連などに未解明の部分もある。今回、本書図版を購入した日本医師会より図版の研究利用を同意いただいたので、概略を報告したい。全体は以下の順次で構成され、内容の区切りは▲で示した。

①人間の臓腑図(内景図)全体と、五臓五腑の相関を示す肺—大腸、心—小腸、肝—胆、脾—胃、腎—膀胱の各図。②寄生虫14種各々が起こす病症と針治法。▲③5色で五行を象徴させ、以下の各図を線で連結して相関性を示す。五蓮花、梵字のア、五輪塔、薬師如来の顔面五官図、手の五指、馬の五臓に対応する孔穴部位図、馬の内景図と上中下三焦、馬の15器官図と全身位置図。④馬の五臓に対応する五形を天(顔の五官)・中央(面頸胸腹と百会)・地(四肢と尾)で説明し、馬に呼びかける五音の反応で五臓の病と予後を知る秘密。▲⑤馬の妊娠一〜五ヶ月ごとの胎児を五輪塔の形成で図説。⑥五輪碎で生死を知る極秘を梵字のア(勢)・ウン(主人)で説明し、五輪塔・馬体五臓・主人五官の相関を五色と線引きで図説。▲⑦人体を四方で守る四神(朱雀・青竜・白虎・玄武)と五臓の神格化図、それに中国医学五臓説を略記。⑧人体の五腑と三焦を神格化した図。▲⑨庚申信仰による三尸神図、五臓と大小腸の図、肝腎に宿る五魂と肺に宿る七魄の人形図。⑩九虫図と各々が起こす病症を薬と針灸で治療すべしとの説明。⑪5色の五臓に五行説で注記し、中国医学の臓腑論および薬方・針灸で治療すべきことの説明。▲⑫八卦、手五指、五輪塔、馬面、馬の背面五臓と腹面五臓が相関する模式図と、末尾に五輪塔に凝した人間の五臓図。

中国で人体臓腑を描いた「内景図」は古代からあったかもしれないが、確実な作成記録は唐代630年に太宗帝に献上された『明堂人形図』が最古だろう。のち北宋の刑屍解剖に基づく『存真環中図』(1113)から写実性が加わり、日本にも伝来して僧医・梶原性全(1266-1337)の『頓医抄』(1304)巻44に引用されている。

文永4(1267)年奥書の『馬医草紙(馬医絵巻)』(東博蔵)からすると、当時から僧医が馬を薬草で治療していた。馬の内景図は寛正5(1464)年写の『安西流馬医絵巻』(三井高孟氏蔵)にあり、本書の③部分と近似する。寛永16(1639)年写の『馬体五輪比定図及表』(中央競馬会蔵)にも類似図が載り、五輪塔を介して人と馬を関連づけている。江戸後期写らしい絵巻『(仮題)五臓六腑図』(日文研宗田蔵)も、本書③部分に該当する詳細な図説と『頓医抄』も引用した脈診法を記すが、馬医の要素はみえない。

一方、人間の臓腑と各種の虫を描いた図説書は室町後期から出現する。現存書では永禄11(1568)年自筆の『針聞書』(九博蔵)が古く、類似した図説は江戸初期写の『五臓之守護并虫之図』(九大蔵)にもある。江戸初期写の絵巻『針口伝書』(内藤くすり博蔵)には②と同名の虫図があり、各虫による症状と五臓六腑の積聚を針で治療する。江戸中期写かと思われる絵巻『五輪碎并病形』(日文研宗田蔵)には、本書⑥〜⑪と同一の図説があり、その末尾に本書①後半と②の同一図説が筆写されていた。

以上からすると、中国の四神・三尸九虫説と臓腑論および内景図を基礎に、鎌倉時代から馬医も兼ねた僧医の図説書が生まれ、室町時代から虫図も描く針医の図説書が出現していた。それらの混淆が本書の人馬解剖図といえよう。全体では中国の臓腑五行説と密教の五輪(地=土・水・火・風・空=木)概念を介在させ、馬の治療は人間と同一であることを主張している。その確固たる信念は、本書の編者が僧医であり、馬の治療を主としていたことを十分に推測させよう。